
《研究ノート》

宮沢賢治『風の又三郎』の場所 II

平 澤 信 一

抄録

宮沢賢治の少年小説『風の又三郎』には、ふたつの山場がある。「九月四日」の章と「九月八日」の章である。拙稿「宮沢賢治『風の又三郎』の場所」(本誌創刊号、2011.3)では、主として「九月四日」の章を論じ、嘉助による風妖・又三郎の幻視に、映画的想像力が強く働いていることを指摘した。本稿では、主として「九月八日」の章に注目し、さいかち淵で叫んだものは誰かという問題が、全篇を貫く主題と通ずるものであることを指摘する。この問いに、これまで最も魅力的な解答を示したのは、天沢退二郎である。氏は最初期の評論『宮沢賢治の彼方へ』での〈それこそ風の又三郎である〉という前言を潔く撤回し、そこに、一人も知らぬ顔がないのに、十人しかいないはずが、十一人いるという『ざしき童子のはなし』を重ね見た。叫んだのは、〈決して子どもたちのひとりではないがそこにいた子どもたちの一人としてまぎれこんでいた、土地の精霊に擬しうる存在〉だとみたのである。そうしてみると『風の又三郎』には、ほかにも登場人物の人数を巡る不可思議な現象が、随所に見出せるのだった。よく知られた「三年生の問題」はもちろん、「九月四日」の章の冒頭の人数の揺らぎにも、それはおそらく賢治自身の意図を超えて現れている。それらひとつひとつの事象を確認しつつ、『風の又三郎』における存在／不在の問題を考えてみたい。

キーワード

宮沢賢治、風の又三郎、ざしき童子のはなし、草稿研究、全集史、書誌学

『風の又三郎』後半の山場である「九月八日」の章は、リーダー的存在である一郎をはじめとする子どもらがみんなでさいかち淵に行き、四年生の佐太郎が毒もみに使う山椒の粉を流して魚捕りを試みるが失敗して、鬼っこ遊びをするうち、とうとう又三郎ひとりが鬼になって本気になり過ぎみんなを怖がらせる。すると突然、夕立がやって来て、誰ともなく《「雨はざっこざっこ雨三郎／風はどっこどっこ又三郎」》と叫んだものがあり、みんな

なもすぐ声をそろえて叫び、逆に又三郎を脅えさせるというものである。これは「九月七日」ともども、村童スケッチ『さいかち淵』を転用・改稿して成立している^[1]。『さいかち淵』は、やはりリーダー的存在であるしゅっこ〔、点原文、以下同じ〕をはじめとする子どもらがみんなでさいかち淵に行き、毒もみに使う丹礬で魚捕りを試みるが失敗して、鬼っこ遊びをするうち、とうとうしゅっこひとりが鬼になって本気になり過ぎみんなを怖がらせる。すると突然、夕立がやって来て、みんなが逃げこんだねむの木の方かどこか、烈しい雨のなかから《「雨はざあざあ、ざっこざっこ、／風はしゅうしゅう しゅっこしゅっこ。」》と叫んだものがあり、しゅっこを脅えさせるというものである^[2]。だが、両者には決定的な違いがある。それは『さいかち淵』における話者《ほく》の『風の又三郎』における〈不在〉である。

《そのうちに、いきなり林の上のあたりで、雷が鳴り出した。と思ふと、まるで山つなみのやうな音がして、一ぺんに夕立がやって来た。風までひゅうひゅう吹きだした。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまった。河原にあがった子どもらは、着物をかかへて、みんなねむの木の下へ逃げこんだ。ほくも木からおりて、しゅっこといっしょに、向ふの河原へ泳ぎだした。そのとき、あのねむの木の方かどこか、烈しい雨のなかから、／「雨はざあざあ ざっこざっこ、／風はしゅうしゅう しゅっこしゅっこ。」といふやうに叫んだものがあった。しゅっこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足をひっぱられるやうにして逃げた。ほくもじっさいこわかった。やうやく、みんなのゐるねむのきのはやしについたとき、しゅっこはがたがたふるえながら、／「いま叫んだのはおまへらだか。」ときいた。／「そでない、そでない。」みんなは一しょに叫んだ。ペ吉がまた一人出て来て、「そでない。」と云った。しゅっこは、気味悪さうに川のはうを見た。けれどもほくは、みんなが叫んだのだとおもふ。》(『さいかち淵』自筆草稿(2)第10葉、・点平澤、以下同じ^[3])

《そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろごろと雷が鳴り出しました。と思ふと、まるで山つなみのやうな音がして、一ぺんに夕立がやって来ました。風までひゅうひゅう吹きだしました。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまひました。みんなは河原から着物をかかへて、ねむの木の下へ逃げこみました。すると又三郎も何だかはじめて怖くなったと見えてさいかちの木の下からどぼんと水へはいつてみんなの方へ泳ぎだしました。すると誰もなく／「雨はざっこざっこ雨三郎／風はどっこどっこ又三郎」と叫んだものがありました。みんなもすぐ声をそろへて叫びました。／「雨はざっこざっこ雨三郎／風はどっこどっこ又三郎」／すると又三郎はまるであわてて、何かに足をひっぱられるやうに淵からとびあがって一目散にみんなのところへ走ってきてがたがたふるえながら／「いま叫んだのはおまへらだちかい。」とききました。／「そでない、そでない。」みんなは一しょに叫びました。ペ吉がまた一人出て来て、「そでない。」と云ひました。又三郎は、気味悪さうに川のはうを見ましたが色のあせた唇をいつものやうにきつと嚙んで「何だい。」と云ひましたが、からだはやはりがくがくふるってゐました。》(『風の又三郎』自筆草稿第60葉←『さいかち淵』同(2)第10葉^[4])

《けれどもほくは、みんなが叫んだのだとおもふ》と言うように事態を冷静に判断しようとする話者《ほく》の消失。そしてこの話者《ほく》の消失に即応した出来事でもあるのだろうか(入沢康夫は、これを草稿の転用における〈一種のあや〉ではないかと指摘し

たという。^[5]、「叫んだものは誰か」という問いは、いよいよその謎を深め始める。

天沢退二郎はかつて、次のように語っていた。

〈この、打てばひびくというように叫びかえす子どもたちのタイミングのよさ。では、最初「誰ともなく」叫んだのは子どもたちのひとりだろうか。もちろんそう考えることはできる。恐怖にかられて走ってきて、いま叫んだのはおまえたちかときいた三郎に、みんなが「そでない、そでない。」といっせいに（このまたタイミングのよさ）答えたのも、さっき鬼っこのとき三郎に手ひどく扱われた子どもたちの報復的な意地わるだともとれる。しかしそう断定できるような書き方を賢治はしていない。ということはここでは、そうではない、ということなのだとは断定できる。（中略）では最初に叫んだのは誰か。その答を賢治は書いていない。というより、その問いを賢治はさりげなく蔽いかくして、やりすごしている。すなわち、叫んだのは「誰でもなかった」と作者は云いたがっているのである。全体的に非常にリアルな一種の生活童話であり、賢治の他の作品に頻出するとき幻想や超自然的驚異が顔を出さない作品と一般に考えられがちな、『風の又三郎』であるが、この一箇所はまさしく賢治一流の、幻覺的な怪異の露出といわねばならない。（小学校二年生のとき人に借りて初めて『風の又三郎』を読んだぼくの記憶に鮮かに残ったのは、逃げた馬を嘉助が追うエピソードではなくて、このさいかち淵の夕立のふしぎな声であり、そのためか以後この物語は子どもごころに何となく恐ろしい、不安な、あえていえば不健康なものという印象をのこしたのである。）／では最初に叫んだのは誰か。答えはかんたんだ、あまりにも明らかだ。それこそ風の又三郎である。その叫びは、気のつかぬ間にまったく薄くなった作品世界のすぐ向うがわの、沈黙と死の国、存在の世界の声の、時ならぬ闖入にほかならない。あのはげしい夕立——沈黙自身の言葉の蕩尽のすえに、それはこの世の詩のことばとして、ふいに「誰ともなく」誰かののどをふるわせて発現したのである。それもまさしくおのれの名を名ざしつつ。〉（『宮沢賢治の彼方へ』^[6]）

そしてまた、そうした見解を「それはとうに私自身承認しがたいものである今、あらためて考えなおしてみたい」と語りつつ、次のように言う。

〈いまの、二度くりかえされる囁き言葉、《誰ともなく》しかしはっきりと語の一つ一つのききとれるこの声は、もはやねむの木の下の方ともどことも示されてはいないが、決して遠くないどこか、むしろ意外に間近などどこかで発せられたらしく思われるが、しかしよく見ると「どこかで」とさえも書かれてはいない。ただ、何といっても印象的なのは、むしろ衝撃的なのは、ただちに改行さえせずに《みんなもすぐ声をそろへて叫びました》とあって同じ二行がくりかえされる、この即応性・タイミングのよさであろう。この《みんなも》『ぐぐ』をそろへての即応ぶりからは、一番目の《誰ともなく》発せられた叫びを聞いたときの子どもたちが恐怖や違和感どころか、驚愕さえおぼえなかったことがただちに察せられる。なぜか？ それはすなわちその声が仲間の声、子どもたちのひとりの声だったからとみるのが自然ではあるまいか？（中略）子どもたちの中の誰が？ と思ってひとりひとりを点検してみれば、どう考えてみても誰でもない——かくて《誰ともなく（……）ものがありました》とは、唯一不可換的表現であることがわかる。／子どもたちのひとりであるが、しかし決して子供たちの中のひとりではなく、《みんな》に加わっているが《みんな》とは別にある存在——これは決して言葉の遊びでもなければ詭弁でもないことは、すでに『ざしき童子のはなし』を思い出している読者諸兄姉にお見通しであろう。

あの短編の第二エピソード、「大道めぐり、大道めぐり」と叫びながら、十人の子どもらが両手をつないで円になり、ぐるぐるぐるぐる、座敷のなかをまわっていたら、いつか十一人になる。《ひとりも知らない顔がなく、ひとりもおんなじ顔がなく、それでもやつぱり、どう数へても十一人だけ居りました。》その増えた一人がざしきぼっこのだと、こういうことだったではないか。／もちろんいま《誰ともなく》叫んだのがすなわちざしき童子などというのではない。しかしあのざしき童子が、家に住みつく精霊であり、輪になった子どもたちの一人でありながら決して十人の子どもたちのひとりではなかったように、いま《雨はざっこざっこ雨三郎……》と、誰ともなく発声したのは、決して子どもたちの中の一人ではないがそこにいた子供たちの一人としてまぎれこんでいた、土地の精霊に擬しうる存在であると思われるのである。)(『宮沢賢治』鑑^[7])

『宮沢賢治の彼方へ』の刊行は1968年、『宮沢賢治』鑑の刊行は1986年——両見解の相違は、なぜ生じたのだろうか。天沢自身の読みの深まりは、むろん考慮し得る。だが、それにしても、両見解は余りに方向性が違いすぎるのではないか？ そう考えるとき、天沢が前著で言及する〈小学校二年生のとき人に借りて初めて『風の又三郎』を読んだ〉という体験は、非常に重要な意味を持つ。なぜなら、それは1939（昭和14）年12月に刊行された羽田書店版の『風の又三郎』であるからであり、同書では、問題箇所は、次のようになっているからである。

《そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろと雷が鳴りだしました。と思ふと、まるで山つなみのやうな音がして、一ぺんに夕立がやつてきました。風までひゅうひゅう吹きだしました。／ふちの水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だか、わからなくなつてしまひました。／みんなは河原から着物をかかへて、ねむの木の下へ逃げこみました。すると三郎も、なんだかはじめでこはくなつたとみえて、さいかちの木の下から、どぼんと水へ入つて、みんなの方へ泳ぎました。／すると、どこかで誰ともなく、／「どつどど どどうど どどうど どどう／あまいざくろも吹きとばせ／すつばいざくろも吹きとばせ／どつどど どどうど どどうど どどう／どつどど どどうど どどうど どどう／どつこどつこ又三郎、／ざつこざつこ雨三郎。」／と叫んだものがありました。／みんなも声をそろへて叫びました。／「どつこどつこ又三郎、／ざつこざつこ雨三郎。」／三郎はまるであわてて、何か足をひつぱられるやうにして、ふちから飛びあがつて、一目さんにみんなのところに走つてきて、がたがたふるへながら、／「今、叫んだのは、お前たちかい。」とききました。／「そでない、そでない。」みんなは一しよに叫びました。／ペ吉がまた一人出てきて、／「そでない。」といひました。／三郎は気味悪さうに川の方を見てゐましたが、色のあせたくちびるを、いつものやうにきつとかんで、／「なんだい。」といひましたが、からだはやはり、がくがくふるへてゐました。》羽田書店版『風の又三郎』^[8])

羽田書店版に登場する《「どつどど どどうど どどうど どどう」》という《あの歌》——これでは誰だって、叫んだものは、又三郎である、と考えたくなるのではないか。もっとも天沢が昭和39〔1964〕年秋にパリで『宮沢賢治の彼方へ』を書いたとき、最新のテキストだった『風の又三郎』は、昭和31〔1956〕年筑摩書房版であり、これが昭和26〔1951〕年刊行の岩波文庫版（当該箇所は、羽田書店版にほぼ等しい）を手に留学中だった天沢の元に船便で届いていたことは、天沢自身^[9]によって回想されている。従って、引用

は基本的に昭和31年筑摩版によって為されているから、『宮沢賢治の彼方へ』の引用自体に当該箇所《あの歌》は登場しては来ないのであるが、しかし、その読みの方向性については、それ以前の（羽田書店版以来の）印象が拭いがたく残っていたのではあるまいか。これは例えば秋枝美保^[10]が島耕二版の映画（1940.10公開^[11]）に感ずるという、当該箇所における高田三郎＝風の又三郎という描き方への違和についても、同じことが言える。島耕二が依拠したのは、おそらく羽田書店版であるのだから……。

＊

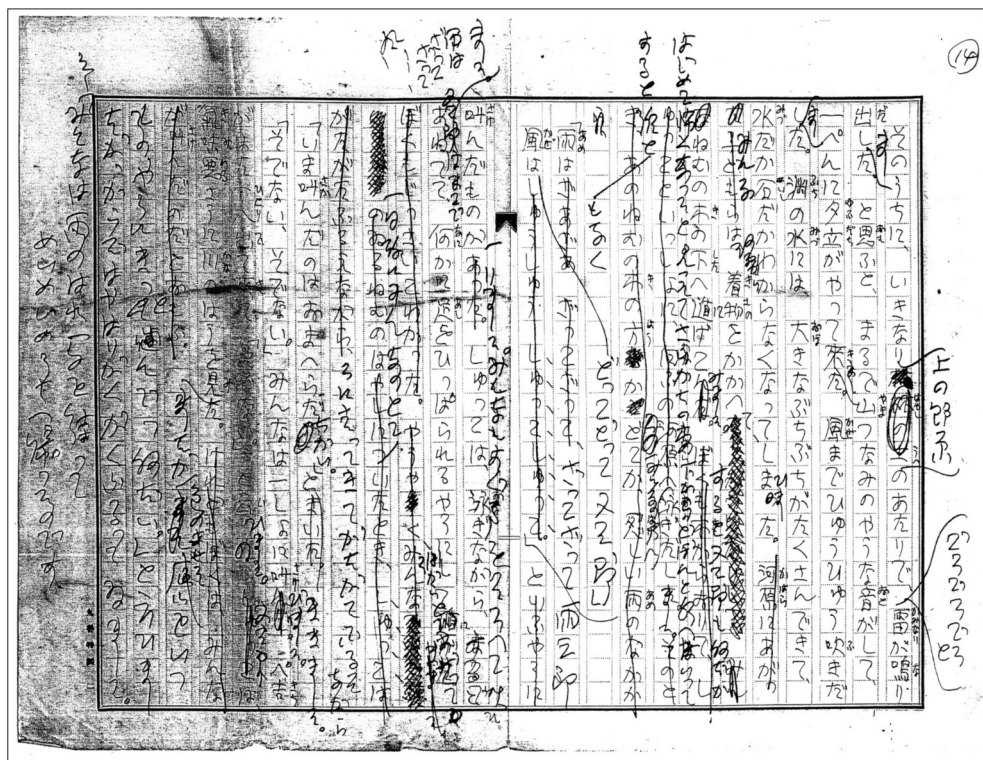
一体、『銀河鉄道の夜』について、『ブルカニロ博士』が登場するヴァージョンだとかしないヴァージョンだとか、いろいろなことが言われているが、『風の又三郎』の《あの歌》が「九月八日」に出て来るか来ないかといった類の話は、聞いたことがない。そこで、ここで、必然の成り行きとして、『風の又三郎』の本文史を振り返っておくことにしよう。

- ①文圃堂版『宮沢賢治全集』第3巻（昭和9〔1934〕年10月）
- ②羽田書店版『宮沢賢治名作選』（昭和14〔1939〕年3月）
- ③十字屋書店版『宮沢賢治全集』第3巻（昭和14〔1939〕年7月）
- ④羽田書店版『風の又三郎』（昭和14〔1939〕年12月）
- ⑤岩波文庫版『風の又三郎』（昭和26〔1951〕年4月）
- ⑥筑摩書房版『宮沢賢治全集』第10巻（昭和31〔1956〕年4月）
- ⑦岩波文庫版『風の又三郎』（昭和42〔1967〕年7月改版）
- ⑧筑摩書房版『宮沢賢治全集』第10巻（昭和42〔1967〕年10月）
- ⑨筑摩書房版『校本宮沢賢治全集』第10巻（昭和49〔1974〕年3月）
- ⑩筑摩書房版『新修宮沢賢治全集』第12巻（昭和55〔1980〕年1月）
- ⑪ちくま文庫版『宮沢賢治全集』第7巻（昭和60〔1985〕年12月）
- ⑫筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』第11巻（平成8〔1996〕年1月）

細かい異同は、更なる別稿に譲るとして、「九月八日」に登場する《あの歌》について言えば、これが初めて登場するのは、②羽田書店版『宮沢賢治名作選』。③十字屋書店版全集・全六巻＋別巻一は、古書店で三巻本の①文圃堂版全集が値上がりしているのを見て、紙型を買い取り、第4巻～第6巻及び別巻を加えたと一般に言われるが、『風の又三郎』に関して言えば、同じ第3巻であるにもかかわらず、両者の本文は異なる。①文圃堂版に《あの歌》はなく、今日の目で見れば、むしろ草稿に近い。再び《あの歌》が消え、草稿本文に近づくのが、⑥筑摩書房昭和31年版全集。以後、徹底して草稿を反映した本文掲出を目指す最新の⑫新校本全集に至るまで、基本的に変更はない。いずれにせよ、②から⑤までの《あの歌》が、草稿の当該箇所には、まったく根拠のないものであることは確認しておく必要があるだろう。

〔草稿写真参照〕

草稿を見て印象的だったのは、子どもたちのシュプレヒコールが真ん中の左上欄外のごく小さな書き込みだったことである。しかも実際に書かれているのは《雨はざっこざっこ、／風、》のみであり、もちろん⑫⑨新旧校本全集校異篇には〈作者はこの二行をこのように略記しているが、前出二行のくりかえしとみて本文を校訂した。〉と校訂の事実が記され、⑫新校本では更に、校訂箇所は亀甲括弧でくくって、本文でも分かるようにし



『風の又三郎』自筆草稿第 60 葉（宮沢賢治記念館提供）

であるから、全集の処置としては問題ないが、それにしても、多数の論者が繰り返し注目している問題箇所が、このような場所にあることには、やはりいささか驚かざるを得ないのであった。と同時に、この《誰ともなく》の〈闖入〉は、『さいかち淵』には話者《ぼく》がいて理知的な判断を下そうとするが、『風の又三郎』にはそれがないという次元に留まるものではなく、欄外への筆致がもたらす起源の他界性にまで結び付いてゆくものであることを明らかに指し示しているのであった。そして、だからでもあろうか。そもそも『風の又三郎』というテキストには、あのまことによく知られた《三年生》の問題をはじめとして、〈いる／いない〉という主題が、あちらこちらで展開されていたのではなかったか。

「九月四日、日曜」の章の冒頭は、草稿に最も忠実な⑫新校本全集の本文では、次のようになっている。

《次の朝空はよく晴れて谷川はさらさら鳴りました。一郎は途中で嘉助と佐太郎と悦治をさそって一諸に三郎のうちの方へ行きました。……みんなはまるでせかせかと走ってのほりました。向ふの曲り角の処に又三郎が小さな唇をきつと結んだまゝ、三人のかけ上って来るのを見てゐました。三人はやっと三郎の前まで来ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も云へませんでした。嘉助などはあんまりもどかしいものですから、空へ向いて「ホッホウ。」と叫んで早く息を吐いてしまはうとしました。すると三郎は大きな声で笑いました。「ずゐぶん待ったぞ。それに今日は雨が降るかもしれないさうだよ。」／「そだら早ぐ行ぐべすさ。おらまんつ水呑んでぐ。」／三人は汗をふいてしゃがんでまっ白な岩からこぼこぼ噴きだす冷たい水を何べんも掬ってのみました。／「ぼくのう

ちはこゝからすぐなんだ。ちゃうどあの谷の上あたりなんだ。みんなで帰りに寄らうねえ。」／「うん。まんつ野原さ行くべすさ。」／みんなが又あるきはじめてとき湧水は何かを知らせるやうにぐうっと鳴り、そこらの樹もなんだかざあっと鳴ったやうでした。／四人は林の裾の藪の間を行ったり岩かけの小さく崩れる所を何べんも通ったりしてもう上の原の入口に近くなりました。》(『風の又三郎』自筆草稿第24-25葉^[12])

これも天沢退二郎^[13]が指摘するとおり、《一郎》は《嘉助と佐太郎と悦治》を誘ってやって来たのだから、一行は《三人》ではなくて《四人》のはずである。そうして《三郎》が加われば、《四人》ではなくて《五人》なのでは？——ここにも《ざしき童子》のごとき〈見えない一人〉が〈現出／消失〉している。従来全集等本文では、①文圃堂版《三人／四人》、②『宮沢賢治名作選』《三人／四人》、③十字屋書店版《三人／四人》、④羽田書店版『風の又三郎』《三人／四人》、⑤岩波文庫《三人／四人》と草稿のままが続くが、《あの歌》では草稿に返ったはずの⑥筑摩書房昭和31年版全集では、逆に実態に即して《四人／五人》と校訂されている。⑦岩波文庫昭和42年改版では《三人／五人》という驚くような本文もある。⑧筑摩書房昭和42年版は《四人／五人》、⑨校本、⑩新修、⑪ちくま文庫版、⑫新校本は、もちろん草稿どおり《三人／四人》である。

この〈見えない一人〉は、だが、やはり偶然〈現れた／消えた〉ものとは思われない。実は、《三年生》の〈存在／不在〉と《誰ともなく……叫んだもの》の問題は、その深層において結び付いており、〈見えない一人〉の問題も、そのもうひとつの現れなのではないか。そこで、最後に、『風の又三郎』の核心とも言える《三年生》の問題を、もう一度確認しておくことにしよう

＊

少年小説『風の又三郎』は、四行の《あの歌》に続いて、次のように始まっている。

《谷川の岸に小さな学校がありました。／教室はたった一つでしたが生徒は〔ナシ→三年生がないだけであとは〕一年から六年までみんなありました。》(『風の又三郎』自筆草稿第1葉^[14])

そして、前稿冒頭でも引用したとおり、〈作者は推敲時に「三年生がないだけで」という加筆をしているが、そのあとの部分では、三年生が何人もいることになっている。〉^[15]のである。①文圃堂版以来、⑧筑摩書房昭和42年版までは、草稿第7葉の《六年生は一人 五年生は七人 四年生は六人 三年生は十二人 組ごとに一列に縦にならびました》の《三年生》を《一二年生》と読み換えることで(そうすると、後に登場する《二年生は八人 一年生は四人》と符合することもあって)、《三年生》の存在は、本文の奥に押し隠されていた。少し後で教室に赤毛の子どもを発見した学童たちが《「あゝ 三年生さ入るのだ。」》と叫ぶのとも呼応して、それは実に自然に感じられた。だが、それは(最後に書かれた)「九月二日」の章で、《四年生》の兄《佐太郎》に《木ぺん》をとられた、《三年生》であるはずの《かよ》^[16]が《二年生》にされ、《「では三年生のひとはお休みの前にならった引き算をもう一ぺん習ってみませう。これを勘定してごらんなさい。」先生は黒板に25-12と書きました。三年生のこどもらはみんな一生けん命にそれを雑記帖にうつしました。かよも頭を雑記帖へくつつけるやうにして書いてゐます。「四年生の人はこれを置いて」17×4と書きました。四年生は佐太郎をはじめ喜蔵も甲助もみんなそれをうつしました。》『風の

又三郎』自筆草稿第24葉^[17]の《三年生》が、これも《二年生》に置き換えられた結果なのであった。あるいは①文圃堂版から⑤岩波文庫版までの同じ箇所は、『では四年生のひとはお休みの前にならつたことを、もう一ぺん習つてみませう。これを勘定してごらんなさい。』／先生は黒板に17×4と書きました。／四年生は佐太郎をはじめ喜蔵も甲助もみんなそれをうつしました。』^[18]と《三年生》の影すらない。もちろん今なお、『では一年生（と二年生）の人はお習字のお手本と硯と紙を出して、二年生と四年生の人は算術帳と雑記帳と鉛筆を出して、五年生と六年生の人は国語の本を出してください。』という⑦岩波文庫版^[19]の《（と二年生）》は余りに不自然なのだが……。

そうした箇所の草稿における実態を初めて明らかにしたのが⑨校本全集であり、しかし矛盾が生じた結果、⑩新修版（と⑪ちくま文庫版）では逆に《三年生がないだけであと》という加筆の方が本文から外されたのである。そうすれば《三年生》を巡る矛盾は奇麗に解決する。それは一つの大きな発見であった。だが、この本文校訂は正しかったのだろうか？

およそ文学作品にとって、その真のリアリティを支えるものは、作家固有のモチーフであり、それは必ずしも理屈の通ることを要求しない。当の校訂を施した天沢自身^[20]が後に〈これをいちがいに、作者の消し忘れなどと云ってすむものではないかもしれない。少なくとも、一般向けの、あるいは子ども相手の刊本だからといって、安易に、「三年生がないだけで」を削除しさえすれば〈後は全く問題がない〉などというべきではなかった〉と語り、当該箇所についての作者心理上ならびに作品要請上の必然性を指摘しているとおり、やはりこの本文校訂には無理がある。《又三郎》は不在の《三》を目指して、ここに現れたのであり^[21]、この一文は、作家にとって決して置き換えの効かない〈唯一不可換的〉なものなのだ。それはまた、ここまで「九月八日」に《叫んだもの》は誰かをはじめとして、「九月四日」の〈見えない一人〉を検討した本稿の主旨からも導き出される結論であり、《三年生》は〈いるけれどいない〉のであり、《風の又三郎》もまた、そのような場所から現れ出るものであることは繰り返し言うまでもないだろう。

【注】

- [1] 『新校本宮沢賢治全集』第11巻・本文篇（筑摩書房、1996.1）172-211頁。
- [2] 『新校本宮沢賢治全集』第10巻・本文篇（筑摩書房、1995.9）67-74頁。
- [3] 『新校本宮沢賢治全集』第10巻・本文篇（筑摩書房、1995.9）73-74頁。ただし、ルビは、省略した。
- [4] 『新校本宮沢賢治全集』第11巻・本文篇（筑摩書房、1996.1）208頁。
- [5] 天沢退二郎『謎解き・風の又三郎』（丸善ライブラリー、1991.12）170頁に紹介されている。
- [6] 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』（思潮社、1968.1）39-40頁。
- [7] 天沢退二郎『風の又三郎』再考——「九月八日」の章末をめぐる——（『言語文化』第2号、1984.2）8-9頁初出、『宮沢賢治』鑑（筑摩書房、1986.9）289-291頁収録。
- [8] 宮沢賢治『風の又三郎』（羽田書店、1939.12）142-144頁。
- [9] 宮沢賢治記念会編『修羅はよみがえった』（ブッキング、2007.9）257頁。
- [10] 秋枝美保『風野又三郎』としての『風の又三郎』（『国文学』1996.6.）32頁。
- [11] 『風の又三郎』1940年10月公開（モノクロ）、製作＝日活多摩川、監督＝島耕二、脚本＝永見隆二、小池慎太郎、撮影＝相坂操一、出演＝片山明彦（三郎）、大泉滉（一郎）、星野和正（嘉助）、中田弘二（先生）、北龍二（三郎の父）

- [12] 『新校本宮沢賢治全集』第11巻・本文篇185-186頁。
- [13] 天沢退二郎『謎解き・風の又三郎』91-93頁。天沢は同書で、この人数の違いを、映画のフレームの問題と関連付けて考察しており、『風の又三郎』に映画の想像力を認める本稿にとっても、それは大変興味深い指摘である。
- [14] 『新校本宮沢賢治全集』第11巻・校異篇238頁から抄出。《教室は…》以下は①鉛筆②ブルーブラック1インク③黒インク④ブルーブラック2インクという改稿過程のうちの②による手入れと直後の加筆。
- [15] 入沢康夫・天沢退二郎「編集室から」『校本宮沢賢治全集』第10巻月報（筑摩書房、1974.3）8頁。
- [16] このエピソードが、同級生の《慶助》に《木ぺん》をとられた《キッコ》が、見知らぬ《おちいさん》から不思議な《鉛筆》をもらう『みちかい木ぺん』を連想させることは言うまでもない。風妖《又三郎》が降りてくる《高田三郎》と、不思議な力を持った《木ぺん》が手に入る《キッコ》の在り様には、どこか共通性があるように思われる。
- [17] 『新校本宮沢賢治全集』第11巻・本文篇183頁。
- [18] 文圃堂版『宮沢賢治全集』第3巻、232頁。
- [19] 岩波文庫版『風の又三郎』昭和42年改版86刷21頁（2011.4）
- [20] 天沢退二郎『『風の又三郎』再考——三年生の問題』洋々社『宮沢賢治』第5号、1985.4、44-45頁初出、『《宮沢賢治》鑑』筑摩書房、1986.9、300頁収録。
- [21] ちなみに島耕二版の映画では、いないのは《五年生》になっている。《高田三郎》が《五年生》であることに由来するそれは、それなりに現実的な解釈ではある。
- [*] 賢治テキストの引用は、特に断りのない場合、筑摩書房版『新校本宮沢賢治全集』に拠ったが、自筆草稿コピーを傍らに置いて、随時、参照した。
なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C「宮沢賢治の草稿生成論的研究—『風の又三郎』を中心に：課題番号25370238」）による研究成果の一部である。
拙稿「叫んだのは又三郎だった？—『風の又三郎』「九月八日」の章末をめぐる—」（『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第44号〔テキスト・クローズアップ③〕、2012.3、18-19頁）は、このノートに基づいて書かれたものである。